

今日は節分^{せつぶん}です。

節分は、もともと字のとおり季節の分かれ目である「立^{りっしゅん}春・立^{りつか}夏・立^{りっしゅう}秋・立^{りっとう}冬」それぞれの前日のことで、一年に四回あり、それがいつの間にか立春の前日だけをさして節^{せつ}を分ける「節分」といわれるようになりました。

昔^{こよみ}の暦^{いんれき}は陰暦でしたので、節分はその年の終わりに行う「追儼^{ついな}の式^{ついな}」でした。追儼とは、「鬼^{やくばら}」を払^{やくお}う、つまり厄払いや厄落としをすることです。追儼の式は、中国^{しゅう}の周の時代に宮廷で始まり、日本でも七〇六年に宮中で初めて行われて宮中行事となり、やがて民間に伝わり、後世には神社仏閣でも節分の日の夜に、追儼の式が豆まきとともに行われるようになりました。

節分にしても、追儼の式に行う豆まきにしても、お釈迦さまの教えからは来ていない、民間の習慣ではありますが、節分の厄落としが、神社仏閣に詣^{もう}でる節分詣でと繋がり、この節分詣でから寺院でも豆まきを行うようになったそうです。そして、その節分に行われる豆まきや法要行事を節分会と称しています。

さて、節分の豆まきは掛け声をかけながら豆をまく習慣があります。その掛け声のかけ方は地域によりいくつかの種類があるようです。「鬼は外、福は内」と言うところが多いようですが、「福は内」とだけ言うところもあり、また、「鬼も内、福も内」と言うところもあるようです。

福はいずれも内に来るようにと共通しているのですが、鬼は外に行けと言われてたり、内に来いと言われてたり、あるいは鬼はいないという立場であったりと、鬼の扱いにはそれぞれの考え方の違いが見受けられます。

一般的に鬼とは、邪鬼^{じゃき}というわざわいが外からやってくると考えられていますが、その一方で、鬼という言葉の語源には隠^{いんとん}遁^{いん}の隠という字を書いて「才又」、つまり、隠れていて見えないものからきているという説もあります。この意味から考えますと、それぞれの心の中に潜^{ひそ}む鬼の存在も忘れてはいけません。

目に見えない心の中の鬼とは、仏教的に考えますと、自分自身の煩^{ぼんのう}悩^うということになるでしょう。その鬼は外へ追い出すことができませんので、自分の心を調えることにより退治しなければなりません。

節分という節目に、お寺の節分会に参加したり、あるいは、ご自宅で豆まきをし、
自分自身の心を調べ、また今日からの毎日を心^{さわ}やかに暮らしたいですね。

— 終 —